

伊達政宗公
誕生450年
シリーズ
第七回

政宗の人物像③

—もてなしの心とまちづくり



食のもてなしや多数の贈り物など、細やかな気配りを欠かさなかった伊達政宗。もてなしの心からみえる、その人物像について、仙台市博物館学芸普及室長に聞きました。

食ともてなしの心得

政宗には、食にまつわる言葉や手紙が多く残されています。当時、食は政治や文化の儀式を執り行う上で切り離せない重要なものと考えられ、政宗も幼少期から茶や和歌などと同様に必要な素養を身に付けていました。

政宗は、「料理心なきは拙き心なり」との言葉を残し、日々の献立を練るなど、食を大切に考えていました。また、もてなしとは、品数をそろえるのでは



伊達政宗書状 伊達成実宛
仙台市博物館蔵
根白石で川狩を行って鮎を捕ったことを伝える自筆の書状

なく、これぞという一品を準備し、その人の目の前で調理したり、自ら配膳して料理を出し、その意図を説明したりすることだと話しています。

誰と何を食べるかについて、きめ細やかな心配りをみせた政宗。その気遣いが、政治的・文化的な交流を深めることにつながったのかもしれない。

仙台藩特産の贈り物

政宗は、多数の贈り物を贈ったことでも知られています。将軍家への忠誠を示すためや年中行事としてだけでなく、知人や親族にも自慢の逸品を贈り、その際には、食べ方などを記した手紙を添える心遣いもみられました。

仙台藩の馬や鷹は、全国的に評価が高い名産品として献上され、鮭は一般の贈り物として最も多く使われました。鮭は塩蔵させた塩引や発酵させた鮎として贈られることが多く、鮭を加工・保管するための施設もありました。川狩や鷹狩を好み、自ら捕った鮎や雁などを贈ることもあったようです。

また、仙台藩領で産出した茶を「自分の領地の茶はこれからもっとよくな



広瀬川を遡上する鮭
政宗は広瀬川などで鮭漁の見物をしたと記録に残っています

り、奥州の宇治と呼ばれるようになる」という趣旨の手紙を添えて贈ったほか、城下に茶畑（現在の若林区元茶畑）を作らせ、茶の生産にも取り組みました。

積極的な技術導入

政宗は、酒の醸造や塩田開発、紙の生産など、全国各地からの技術導入を積極的に進めました。例えば、河内国の道明寺繻の技術を取り入れた繻（注）は、後に幕府に献上される名産品になりました。上方や江戸で暮らす中で、さまざまな生活文化に影響を受け、藩の将来を見据えて、積極的に産業振興を図ったものと考えられます。

政宗は、新たに導入した技術を藩の産業として育成するとともに、贈り物としても活用し、幕府や大名との良好な関係を築きながら、この時代を生き抜いていったのです。

※注 米を蒸して日に干したものを。旅や戦いの際の携行食料として利用された
●本稿では、仙台市博物館の学術研究機関の立場から、歴史上の人名に敬称を付していません